



Salamander  
in  
the circle

第十七章

ブルー・マーキュリー 遭難

峯村 明

# Salamander in the circle

## 登場人物

### 第十七章の登場人物

レル・ヴァリス	……	エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ	……	エウメロス王国・王女
カール	……	エウメロス王国・王子 ヘルガの弟
コタエ	……	世界の果ての島の王に仕える女官
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者 コタエの兄
コパーン博士	……	評議会西支部の科学者にして管理人

### これまでの主な登場人物

ネ	ダーヴェ	……	学術調査団の団長	ホシナ	……	ホシナ族の族長。マミヤの父	
ウ	ヒューダー	……	学術調査団の団員	オマキ	……	ホシナの妻	
ト	ヤスウ	……	学術調査団の団員	マミヤ	……	ホシナとオマキの娘	
ラ	ハイヤーン	……	本部科学者のリーダー	ゴン・キト・コマ	……	ホシナ族の男たち	
評	ティコ	……	科学者	世	サノヒコ	……	王に仕える役人
議	ナシル	……	本部・事務職員	界	アマセオ	……	王の兵士 シトリ族の者
会	バウル	……	国王	の	カガセオ	……	アマセオの弟
ケ	ウルリク	……	第三王子	果	ヤサカオ	……	アマセオの旧友
ス	ヘンリク	……	ウルリクの息子	て	チドリ	……	アマセオの妻
ト	ソルド	……	警備隊長	の	ハマツ	……	チドリの父
ル	バンテオラ	……	メッサナ市の総督	島	タマシギ	……	ハマツの息子
王	コモラ	……	メッサナ総督の顧問		オモイカネ	……	王に仕える者 日読み
国	バラム&バランケ	……	双子のジャガー。バンテオラの部下		フツヌシ	……	王に仕える者 将軍
	メルノ	……	音楽家		ミツハ	……	メッサナからの亡命後のメルノの偽名
	バレルダリス	……	メッサナ市の総督家の一人。総督代理	黄	皇帝	……	皇帝
	メンドルフ	……	メッサナの化学者	金	バイスロイ	……	皇帝の息子
				門			
				市			

## 目次

### 登場人物

#### ブルー・マーキュリー遭難

269.

270.

271.

272.

273.

274.

275.

276.

277.

278.

279.

280.

281.

282.

283.

back number

第十七章のあとがき

奥付

## ブルー・マーキュリー遭難

269.

(半径四百キロだと？　うちのシマは……ギリ、セーフだな)  
(ギリセーフどころか、余裕で圏外です)

ネウトラ評議会本部を世界の中心に置いて麗々しく描かれた世界地図の前で、スクナ、コタエ兄妹は額を寄せてひそひそとささやき交わしている。地図には評議会本部を中心に、おおよそ半径四百キロを示す赤い円が手書きで描かれていた。その地図をエウメロスの面々が無表情に眺めている。“うちの島”どころか、エウメロス王国も余裕の圏外なのだ。彼らの王国と評議会本部とは四百キロの十倍は離れていた。

(※・四百キロはほぼ東京―神戸間の距離)

ようするに、本日より三十日後から百日後までの七十日間、評議会本部を中心に半径四百キロメートル内の居住地に住み、全員地下壕に避難しなければならないのは、当の評議会関係者くらいなのである。

「……大騒ぎするほどのことではなかった、ですね……」泡をくって駆け回ったカール少年は気まずそうにつぶやいた。監視、もとい、立ち合いを切り上げて駆けつけてきたレルは首を振った。「評議会が何をしようとしているのか、これは重大な情報です。どう思われますか、皇帝陛下」

たいそうな老人のはずの黄金門の皇帝は意外な身軽さでレルと共に作戦指令室に駆けつけていた。見た目ほど年寄りではないのかもしれないとレルは思った。

「さてな。この範囲を七十日間避難させるということは――」

「は」

「たいしたことはできんということだ」

「そ、そうなんですか!？」

「うむ。ネウトラ評議会もよほど人がいないと見える」

緊急事態に大慌てで集合した面々は困惑の表情で互いに顔を見合わせた。彼らにはネウトラ評議会からの避難指示を評価するすべはなかった。

(カール殿下) レルは遠感を使ってこっそり呼びかけた。(ナシルの方はどうですか?)

(それが——様子を変なんだ——)

レルの視線を受け、カール殿下はじっとりと脂汗を浮かべている。彼は自分がオオカミ少年の立場になりつつあるのを感じていた。

ナシルという男がヤスウの委託を受けてネウトラ評議会の内部情報を漏らす存在であることは、レルとコタエがヤスウを保証したことによって皆に受け入れられた。評議会の公式通達が原子炉賛成派によるものであることも。

そして今、原子炉賛成派が三十日後に近在住民を地下に避難させるような、何事かを起こそうとしている。

カールは驚いて緊急招集をかけたものの、よくよく見ればエウメロスに直接の影響はないことがわかった。とはいえ、評議会は七十日の避難を要請している。彼らは何をしようとしているのか。評議会内部にいるナシルなら何事か知っているはずなのだが、ナシルに呼びかけても雑音が入ってうまく繋がらないのだった。

遠感の経験に浅いカールにはその原因がなんなのか——ナシルの精神状態によるのか、それともカール自身にあるのか、あるいは別の何かか、まったく判別できなかったのだった。

遠感による情報を証明するのは難しい。遠感者本人には現実なのだが己の信用を失えばそれまでなのだ。ありていにいって、周囲の者からすればすべてウソかもしれないの

だ。情報の重要度が増すほど、その影響ははかり知れない。

エウメロス王家の貴公子は本当にオオカミ少年と化しつつあるのか、はたして――

## 270.

ネウトラ評議会に本部があるからには支部も存在する。ケストル王国、エウメロス王国を置く大陸の西のはずれにそのひとつがあった。評議会西支部である。実は、西支部は古代の資料の宝庫だった。本部の資料が損なわれるのを防ぐため、その複写版、いつてみればバックアップが西支部に置かれ、保管されていたのである。そのような地味な役割であるため、西支部の存在を知る者はほとんどいなかった。

古代の資料は書かれたり彫られたりはしていない。結晶の安定した鉱物……水晶……の中に封じられている。情報の入出力には、巨人族の情報を水晶製眼鏡に封じ込めたダーヴェェや、それを取り出したコタエのような、上級賢者クラスの資質と技能が必要だった。それは物質を越えた次元で行われるのである。そのような才能を持つ者は、どの時代にも稀有だった。

西支部の管理を任されていたのは、コパーンという科学者だった。だいたいネウトラ評議会の主な目的は……長い歴史の中で目的は様々に変化した……世界の治安維持の方向に推移してきたため、物質重視の価値観を持っていた。コパーンは物理学者であり、上級賢者のような霊的能力には乏しかった、というか、管理人にそのような能力はあまり重視されなかったのである。

能力が欠けていたにもかかわらず、コパーンは古代の知識に興味しんしんな人間だっ

た。好奇心が先だって図書館の解読不能な書物をひもとくようなことを、たびたびしてきた。いってみれば、なんの資格も持たない好事家が深遠な秘儀の書を覗き見たのである。

それはコパーンの専門である物理学とは異なる次元に広がる世界だった。訓練も受けおらず、指導者も持たない彼だったが、科学者としてのプライドは高く、なんの問題もない、と思った。解釈できると思ったのだ。

悲劇はここから始まる。

## 271.

ネウトラ評議会本部の地下壕で、上司のハイヤーン博士を奈落の底へ突き落してトップに立ったティコの心は燃えていた。燃えてはいたがひじょうに焦ってもいた。

原子炉をつくるという案をぶち上げた方がいいが、なにしろ、人がいない。

評議会の科学者としてのプライドはコパーンよりなお高く、そのためまるで気が進まなかったが考え得るかぎりの科学者に向けて支援を要請した。巨人族大襲来という、人類史上まれにみる大災害、科学者たるもの率先して協力すべきであった。

ところが、支援要請先の筆頭、メッサナ化学者団が真っ先に断わってきた。その理由もまた延々と伝わってきたが、まさかの拒絶……というより、突っぱねられた……に逆上したティコはメッサナのメンドルプ博士の言葉に聞く耳もたなかった。メッサナ市の本家筋、アンベレオ王国が当市を封鎖し、あらゆる交流が不可能になったとわかってからは、アンベレオに好意を抱くほどであり、（メッサナ市ざまあみろ）とこっそりつぶやいたものだ。

だがそんなことをつぶやいている場合ではなかった。世界各地の国々は、商工業国アンベレオとの貿易で栄えているところもあれば、智と美の殿堂メッサナで学んだ人材で栄えているところもあった。ということは、世界は真っ二つに分断されてしまったのである。

評議会には巨人族襲来のほかに対応しなければならないことが山のようにあったが、今や己の身を守るのが精いっぱい、優先順位第一なのであった。

全身から稲妻を迸らせていらいと歩きまわるティコに誰も近寄ろうとしない。みな、落雷除けのマントラを（quavara, quavara）と一心に唱えながら自分の仕事に没頭するふりをしていた。それもまたティコの気に障るのだった。

そんなときだった。西支部からハイヤーン博士宛てに通信が届いたのは。

ティコはすばやく通信を横取りした。ハイヤーン博士には表舞台から退場してもらったのだから、その旨、すべからく知らしめねばならなかった。

## 272.

本部科学部の首席科学者が交代していることにコパーンは驚いた。交代の理由も先代ハイヤーン博士の行方も詳しい説明はされなかった。もっとも、巨人族襲来時に本部では実に大勢の人々が行方知れずになっている。ハイヤーン博士もそういう運命をたどったのだろう、だから詳しく説明ができないのだろうと深く追求しなかった。そして、彼は切り出した。「原子炉の件ですが……」

「原子炉建造を計画中とか。その件で、わたくし、お役に立てるか」と

ティコは西支部のコパーンという男を知らなかった。そもそも西支部は単に資料保管



庫である。本部に万が一の事態が起こった場合に備えて本部から遠い、人里離れた秘境のような場所に置かれている。そこには管理人しかいないはずなのだ。しかしコパーンと言う。「オクロの天然原子炉を知った時から原子核反応には大きな関心をいだいてきました。曰く、

『天然原子炉では、ウランに富んだ鉱床に地下水が染み込んで、水が中性子減速材として機能することで核分裂反応が起こる。

核分裂反応による熱で地下水が沸騰して無くなると反応が減速して停止する。鉱床の温度が冷えて、短命の核分裂生成物が崩壊したあと、地下水が染み込むと、また同じサイクルを繰り返す。このような核分裂反応は、連鎖反応ができなくなるまで数十万年にわたって続いた。

ウランの核分裂では、5種類のキセノンガスの同位体が生成される。オクロでは5種類すべての同位体が天然原子炉の痕跡から発見されている。鉱床のキセノンガスの同位体比を調べることで、20億年たった現在でも核分裂サイクルの周期を知ることができる。計算ではおよそ30分活動したあと2時間30分休止するサイクルだった。

天然原子炉が臨界に達することができた理由は、天然原子炉があった当時、天然ウランの核分裂性同位体 $^{235}\text{U}$ の濃度が3%と、現在（21世紀）の原子炉とほぼ変わらなかったからである。（wikipedia）』

この天然原子炉を巨人族が避けていたこともわかっています。原子炉の何かが……発生するエネルギーか、あるいは核反応時の副産物かが、巨人族に支障をきたすのだ。博士、あなたはこれを人工的に造ることができるとお考えなのでしょう？ そしてこれによって巨人族を一網打尽にできると」

ティコは話の途中から手が震えた。コパーンの話はティコが補足する必要がまったくないものだった。ティコはただうなずくだけだった。コパーンは言った。「ティコ博士、私はあなたの計画に賛成するものです。あなたの計画を成功させましょう。私がお

手伝いします」

感激のあまり、ティコは通信機のマイクに向かって叫んだ。「友よ！！」

## 273.

「長年の研究の結果、原子炉というものの仕組み、理論を、私は確実に理解いたしました」

コパーンは通信機のマイクに向かって言った。はるか東の本部の受信機の前ではティコが全身に力をみなぎらせ、両こぶしを握り締めて聞いている。

「ティコ博士、解決せねばならない問題がいくつかあります」

それを聞いてティコは激高するよりもむしろ胸をなでおろした。

「そう。そうなのだ。まず燃料となる物質だが、こういうのが得意なメッサナの化学者に依頼していたのだが、ご存じのとおり、メッサナが封鎖されてしまってね」

猛烈な批判と共に突っぱねられたことは黙っていた。けれどもコパーンはたしかに燃料物質を確保するのが難しいとわかっているのだ。

「ご安心ください。こちらにウランの手持ちがございます」

「なんと！！」

ふだんのティコならばなぜそんなものをおまえが持っているのだと追及したかもしれないが、今はふだんではない。超緊急時である。ウランは喉から手が出るほど欲しかった。手下、もとい、部下の科学者らに調合を命じたが実験はことごとく失敗している最中、黄金を作れるのだからウランなどものの数ではなからうと高を括って依頼しただけに、メッサナに対する怒りが倍増しているまっ最中だった。

ティコは尋ねた。そちらにあるというウランは現物なのかと。調合品ならば、そのフォーミュラ（化学式、手順書）は？

どちらもございます、とコパーンは答えた。しかし移送の手段がない。以前はデータを伝送する技術があったが巨人族のせいではほとんど壊滅、今は音声のやり取りしかできない。本部の地上は巨人族がうようよしているし、むろん、空港はとうに破壊し尽くされていて航空機もない。

（こんなことならあの魔法使いの小僧を手元に置いておくんだった！ おのれハイヤーンめ、とつとと追い出しおって！！）

ティコはぎりぎりど歯ざりしたがあとの祭りである。

「ティコ博士、こちらに無人の偵察機があるのです。大型の鳥くらいの大きさですがある程度の重量は積めますし、こちらのリモートコントロール装置も健在、それを使えば西支部と本部を往復させることができますよ」

「そういうことならその手でいこう！ 頼むぞ、一刻も早く！！」

## 274.

——といったやり取りののち、荷物を積んだ無人偵察機は本部へと飛び、巨人族の目をかいくぐり、西支部へ戻って行った。まったく綱渡りのような方法で原子炉が造られようとしていた。

「ティコ博士」、と、コパーンは改まって切り出した。ウラン製造……調合……が軌道に乗り出したころのことである。「ティコ博士、原子炉を造る必要はありませんよ」

思いがけない言葉にティコは心中で（はあ？）と裏返った声で叫び、さすがに自制し

て自制して、「いったいどういうことだ」と低い声で訊いた。「ウランは間もなく完成するのだぞ（これですかしたメッサナの鼻をあかしてやれるのだ！！）」

「原子炉を造る目的は巨人族の殲滅でした。しかしもっといい方法が見つかりました。私が、古代の資料を解読したのです。ひじょうに難解でありましたがついに解読に成功しました。それによると、原子炉は必要ないことがわかりました。ですがウランは必要です」

コパーンは次第に早口になった。古代の資料の解読成功に興奮しているのだった。

「……詳しく説明したまえ」

「巨人族が嫌っているもの、それは膨大なエネルギーでも、ウランが核反応を起こすことで発生する有害な副産物でもなかった。中性子線だったのです」

ウランの原子核が中性子を吸収することによって原子核はほぼ二つに分裂する。このとき、2個または3個程度の中性子が放出される。それらの中性子が次の核分裂を呼び起こすようにして、連鎖的に反応を継続させながら、放出されるエネルギーを得る装置が原子炉である。

原子炉では必要な出力で一定レベルの連鎖反応を行わせるため、制御棒（中性子吸収材）を用い、中性子の量を制御する。（内閣府原子力委員会の資料による）

「巨人族は中性子を嫌うのですから、中性子吸収材などいらんではありませんか」

「——それはつまり——」

「そうですティコ博士。核分裂を制御してはならない。逆です、中性子を外へ向けて放

出するのですよ！！」

「——爆弾——」

「そのとおり！ この爆弾はただの爆弾ではありません。核反応によって莫大なエネルギーが発生しますが爆風も高熱も出しません。中性子だけを放出する。中性子は石などの無機物を通り抜けてしまう。ということは爆風や熱で都市が壊れるということがないのです。巨人族だけが中性子にやられる。どうです」コパーンはつけ加えた。「都市を守る魔法の爆弾です」

## 275.

原子炉を爆弾に造りかえる。文字にすればそれだけのことだが、その厄介な変更の仕様書が無人偵察機に載せられ、まともや西支部から本部へ飛んだ。

ウランを人工的に調合するなど評議会の本領ではないが、ティコは大乗り気だった。なにしろ、あのメッサナを出し抜けるのだから。まちがいなく歴史に残るだろうという意識がときおり彼の脳裏をかすめた。メッサナの協力なしで巨人族から世界を救うのだ。彼の部下になった科学者や技術者たちは自分たちが何をしているのか理解する間もなく、ほとんど言われるままに作業に打ち込んでいた。そうすることで不安と恐怖を忘れることができたから。

現場の人々がそんな有様だったから、はたで見ていたただの事務職員にすぎないナシルに、何がおこっているのかわかろうはずがなかった。手伝ってくれ、と言われれば手伝いに走った。一日のうちに何ヶ所も走り回った。しろうとの事務職員の手を借りなければならぬ修羅場だった。立ったまま食べ物を口に運び、そのへんの壁にもたれて眠った。エウメロスの王子がときおりコンタクトをとってきたが、混乱と繁忙に振り回

されるナシルは返事をする間もなかったのだった。

そんなとき。またまたコパーンから仕様変更の提案がきた。

「ウランを閉じこめた容器に着火するとウランが核反応を起こす。簡単に説明するとこれが核爆弾です。が、核反応によって放出された中性子をいったん閉じこめ、さらなる核反応を促すという、いってみれば、より効率的に反応を起こさせるには容器を重金属で覆う必要があります。外がわを覆って放射線を内がわに反射させるのです」

ティコは口を挟んだ。「重金属と言うと？」

答えはすぐに来た。「コバルト。あるいは水銀」

「コバルトか水銀だと！？ そんなものをこれから調合しろというのか！？」

言い立てながらティコはちらりと考えた。『そんなもの』を調合できたとしたらメッサナを見返せるのは確実——

「実はティコ博士。私は長年これらの重金属の調合に取り組んできました」

なんだって長年にわたってそんなことに取り組んでいたのかとふだんの冷静なティコなら考へただろうが、今のティコは焦りと功名心とにまみれていた。

「なんとコパーンよ、そこまで言うからには——」

「はい、水銀、それも今製造中の爆弾、中性子爆弾に特化した特殊な水銀の調合に、まもなく成功します。はい、間違いありません」

ティコは夢見心地でつぶやいた。「特殊な水銀——」それさえあれば世界が救える。そして——メッサナを見下すことができる！！

「サンプルをお見せしたい。美しい青色をしています。そう、ブルー・マーキュリー、と名づけましょう」

「フォーミュラ（化学式、手順書）は！？」

「すぐに」

「よし！ サンプルとフォーミュラを送ってくれ！ できうるかぎり！ すみやかに！」

## 276.

わけのわからない手伝いに借りだされ、駆けずり回ったナシルはその日死んだように眠り、いくらか頭がはっきりしたので、事務職員としての自分の行動を思い出し、振り返り、書き留めた。

そしてエウメロスのカール王子から幾度かコンタクトがあったことを思い出し、彼を呼んでみた。カールは待ち構えていたようにすぐに応答した。これまでの経緯を説明するのは骨が折れたので、そのかわりに書き留めた日記を黙読した。結果としてそれは核爆弾製造の経緯だった。

(作業は八割方、終わったっていう話だよ。あとは仕上げだって。仕上げに使う物資の到着を待っているところさ)

ナシルと連絡がついたのは、例の避難指示が出されてから……ナシルはこの通告のことを知らなかった……一週間が経ったころだった。評議会は爆弾完成を見越して指示を出していたのだ。

カール王子を囲んだ面々は評議会本部で起こっている事態の、ナシルのそこそこリアルな描写に顔を見合わせた。ナシル本人は自分が何を手伝ったのかまるで意識していないようだった。

(もう何日もろくに寝てないんだ、眠くてたまらない。ちょっと眠らせて……) そのまま通信は切れてしまった。

「評議会が造ったのは原子炉ではない。原子爆弾だ」

黄金門の皇帝のつぶやきに、みなは一斉に彼をみた。彼というよりその言葉を。なんとも禍々しい響きだった。

「ネウトラ評議会とメッサナ化学者団とは双生児のような関係にあった。常に互いを意識し、調和を保っていた。どちらかが突出しないようにな。それが破られた」

「愚問を承知で伺いますが、皇帝陛下、原子爆弾とは危険なものなのですか」沈黙を破ってヘルガは声をあげた。

「はっきり言おうか。しろうとが生半可な知識で作った爆弾ほど危険なものはない。原子爆弾など人間が手を出していいものではない。メッサナはそれを知っているから猛反対したのだ」

## 277.

「評議会のティコ博士という人は、その爆弾こそ巨人族に有効だと考えているようですが」、とレル。

「生物を滅ぼすのにこれほど有効なものはあるまい。だが考えてもみたまえ。生物は巨人族だけではないのだぞ」

そうだ、評議会本部の地下にはまだ人がいる。

「ええ、それで地下に七十日間避難するようにと」

「忘れたのかね、かの爆弾が爆発して放射される中性子線というのは岩だろうがなんだろうが素通りしてしまうということ。地下壕がなんの役に立とうか」



居合わせた者は一人残らず、ぞっと総毛だった。

「その爆弾の使用を、止めることはできないのでしょうか!？」

皇帝はあっさりと首を振った。

「かつては科学技術というものに様々な安全機構が働いていた。偏った知識や技術が暴走しないようにな。今やそれらは残らずはぎ取られた。ことここに至っては誰にも止められぬ」

ネウトラ評議会本部はエウメロスからはるかに遠い。そこで中性子爆弾が爆発したところで、全国民が地下に潜ってしまったエウメロスにはもはやなんの関係もないのだが、黄金門の皇帝の話から察するに、ネウトラ評議会はおそらく最悪の事態を招くことになるのだろう。それはあまりにもいたたまれない未来であり、同時に緊急時に頼りにされるべき評議会の行動としては言語同断の愚かしさだった。

レルは食い下がった。「皇帝陛下、あなたから評議会に進言することはできないのですか!」

相手はレルから目をそらして天井を見上げた。「彼らが造った爆弾は爆発地点から半径数百キロにいる巨人族を確実に一掃するだろう。彼らのやろうとしていることは半分は正しい」

「しかし!! 自分たちも巻き添えをくうのですよ!! 冷静に考えればわかりそうなものだ!!」

「メッサナが原子炉計画を真っ先に反対したという。メッサナの化学者団が携わっているのは単なる三次元物理ではない。多次元にわたる、次元を超えた物理なのだ。反対にあった時に冷静に検討すべきだった。それをしなかった時点で、評議会の進む道は決

まってしまったのだ」

ネウトラ評議会とメッサナ化学者団とは双生児のような関係だと皇帝は言った。

エウメロス人は知る由もなかったが、評議会のハイヤーン博士とメッサナのメンドルプ博士は双生児。ハイヤーン博士の失脚がとりもなおさず評議会とメッサナの決裂を象徴していたのである。

## 278.

スクナとコタエは完全に傍観者だった。世界の果ての島はネウトラ評議会本部からもエウメロスからも遠く隔たり、巨人族の襲来も起こっていない。それどころか、さらわれた巨人、ダイダラボッチを取り返したばかりなのだった。

(なあ、妹よ、兄とともに行こう。おまえ、ここにいても、もうすることがないだろう)

ここにいてもすることがないというのはその通りだった。地下に避難したときに大勢いたケガ人や体調不良者の面倒は黄金門から来た人々が診ている。それは地下道掘削に使われていると同じ力によるものだという。ケガを直し、体調を整えてしまうのだ。コタエがケストル王国へ出向いている間に、彼女の出番はまったくなくなっていたのだった。

コタエ自身、エウメロスを去る潮時なのだろうという予感があった。が、自分で決心するのと、兄とはいえ人から促されるのでは……

スクナは妹の性格はよく知っている。せっついたところで、彼女がおとなしく言うことをきくわけがないくらいのはわかっていた。そこで声をひそめて奥の手をちらりと見せることにした。

(じつはな、まっすぐくにへ帰るわけじゃあないんだな)

コタエは反射的に面をあげた。兄はしれっと横を向いている。

(兄上。それ、どういうことです!?)

(まっすぐは帰らん)

(だからどういうこと!?)

(おれはホシナ族のあとを追っているところなのだ)

コタエは思わず息をのんだ。(世界の果ての島から!?) あとを追ってここへ来たと仰せられますか!?)

(うむ。この大陸の西の海岸沿いを南に向かっている) スクナは手のひらを下に向け、前の方へ滑らせた。“空を飛んで”、という意味で。コタエはそれをみて目を瞠っている。

(まあ、ここまで来たからにはおまえもいっしょにどうかと思ってな)

コタエは兄の言葉を繰り返した。(大陸の西の海岸沿いを南へ? なぜ?)

(なぜかはおれはもちろんのこと、ホシナ族自身、知らんのだ。彼らは星に導かれているだけなのだ)

漠然と、不安の雲がのしかかってくる様子をコタエはイメージした。この大陸の南へ向かうのは——危ないのではないだろうか……

(そういうわけでな。ちょっと寄り道した。あまり長居はできんのだ)

なるほど、とコタエはつぶやいた。体のうちにぽっと、火がともるのを感じる。ホシナ族がどこへ導かれているのか気にもなるが、その火は冒険の衝動だった。

人類の敵、巨人族打倒という大いなる目標の成否が、無人偵察機にはかかっていた。重量のかさむ貨物を詰め込まれ、評議会本部と西支部との間を幾度も往復した。

本来の偵察目的からは外れていたけれども、巨人族打倒のために彼は能力を超えた重労働に耐えた。なんたって、世界を救わなければならないのだ。

無事、二往復したころから、大丈夫だ、と使用者に確信された。二度大丈夫だったのだから三度目も大丈夫だというナゾの確信だった。

フライトを重ねるうち、彼は己の機体が劣化してきているという自覚があった。使命感だけではいかんともしがたかった。

目的外の利用に酷使され、持ち主のコパーンの手も回らなければ気も回らなかったのも、ろくにメンテナンスもされていなかった。そしてその日、疲れ切っていたが、コパーンの期待とティコの要請を受けて機体に鞭打ち、西支部を飛び立った。彼にはブルー・マーキュリーこと青い水銀が託されていた。

西支部を離陸、いったん北上し、東へ進路をとるといういつものコース。眼下は白と青の世界。その恐ろしくも美しい光景を一目見れば魂あるものは心奪われ、厚さ数千メートルの氷でできているとわかれば身がすくむ。氷河だ。

偵察機が、ふっ、とめまいを覚えたのは、彼が魂あるものだったからだろうか。

280.

「情報が重要かどうかにかかわりなく、公式通達かそうでないかにかかわりなく、評議会でも動かさなければならぬことを知らせなさい」

黄金門の皇帝からそう言いふくめられていたので、カール王子はナシルからの連絡を受けてすぐに主要メンバーに召集をかけた。

カールは困惑が滲む顔でみなが集まるのを待った。カールの困惑はナシルの困惑でもあった。

「無人偵察機が行方不明になったそうです。評議会科学部はそれで大騒ぎになっています！」

無人偵察機行方不明で大騒ぎに？ 皆の頭上に？マークが浮かんだのはいうまでもない。

「その偵察機は、評議会西支部から本部へ貨物を運んでいました。この前、爆弾製造の仕上げに使う素材だとナシルが言っていた、重金属です。ブルー・マーキュリーというのだとか」

皆がその話を咀嚼している間に、皇帝は尋ねた。「評議会西支部から本部へ向かっていたのだな？ どのあたりで行方不明になったか、わかるかね？」

「なんでも、西支部を離陸してから四時間後にリモートコントロールの電波を受領しなくなったとか。どうもケストル王国の北方らしいです」

皇帝はカールの言葉を口の中で繰り返しながら世界地図の前に立った。そして左手の指先で西支部の場所を押さえ、右手の指先で本部までの航路と思しきラインをたどる

――

その姿勢のまま皇帝が動かないので、ヘルガは沈黙の中で口を開いた。

「愚問を承知でお尋ねしますが、そのブルー・マーキュリーというのは危険なものなの

ですか??」

「——いや」間をおいて皇帝は応じた。「それはただの水銀の化合物だろう。問題は、偵察機が氷河の上に降りたか落ちたかしたのではないかということだ」

「どういうことでしょう」

皇帝はおもむろに振り向いた。その動きにつれてマントがひるがえった。

「氷河が崩れるかもしれぬ」

## 281.

「ケストルという王国の立地を思い出してほしい」と、皇帝は言った。

「かの国は東に山岳地帯、北に湖沼地帯、南と西に向かって開けた地形にある。天然の要害のような地形に見える」

皇帝はケストルのあたりを指さして言った。

「ひじょうに荒れた無人の土地だった。土地は起伏が大きく、大小の岩が転がり、植物も動物も乏しく、まるで地獄のようだった。ケストル人はそんな土地を開墾し、家畜を放ち、村を作った。人口は殖え、やがて軍隊を持つ王国を建設するに至った。昔の話だが、あっぱれというほかない。だが、かつてその土地がおそろしく荒れていたのには、訳がある。洪水に襲われたのだ」

「諸君は、そんなバカな、と思うだろう。ケストル王国の場所は標高が千メートルはある。完全に高原で、海には縁がないほど内陸だ。しかし水は豊富なのだ」

レルははたと思い出していた。ヒューダー、ヤスウと共にケストル王国の離宮へ忍び込んだときのことを。山岳地帯のふもとだったが、水路が縦横に張り巡らされ、緑が生い茂っていたっけ――

「水は北から豊富に流れてくる。北の湖沼地帯から。さらにその先には」

「氷河！」誰かが叫ぶように言った。「なるほど、雪解け水か！」

「そう、氷河だ。はるか昔のことだが、その氷河が決壊したことがある。莫大な量の水が巨大な氷を伴って、今ケストル王国があるあたりを襲った。百年ほどの間に数度あったという。そのために無人の荒野と化した。若いケストル人はそのことを知らなかったのだろう。

そして困ったことに、決壊のメカニズムがはっきりわかっておらんのだ。

ひとつはこういうことだ、険しい山地の溪谷に氷河が流れ込み、川を途中でせき止め、ダムができる。氷河湖だ。そこへ雪解け水が流入し続け、水位はあがっていく。氷は水より軽いため、水位が一定の高さに達すると、氷のダムは文字通り浮かんでしまう。その瞬間、ダムは決壊する。

またひとつは人為的なものだ。この中にパイロットはいるかね？　パイロットは知っていることだが、氷河の上空の飛行は禁止されておる」

あいにくこの場にパイロットはいなかったもので、誰かが尋ねた。「それはなぜです？」

「湖をせき止めている氷河の上にひとつの熱源を想像してほしい。熱源はじわじわと氷を融かし、穴をあけ、やがて氷河の底にまで到達するクレバスを作る。氷は解け続け、底に解けた水が溜まっていき——氷河を浮き上がらせる。浮き上がった氷は周囲の氷の圧力を受けて、やがて溜まった水と共に一気に——

昔、ダム決壊の調査に赴いたネウトラ評議会の者たちがそれに巻き込まれて全滅した。原因はおそらく氷河上に着陸させた航空機だと思われた。だから不時着などの事故を避けるために飛行そのものを禁じたのだ。そもそも事故があった場合、脱出も救出もできん」

「この地図を見よ。西支部と本部をつなぐ最短距離はケストル北部の氷河地帯を飛ぶことだ。西支部を離陸、四時間後にコントロールが効かなくなったといったな——」

**282.**

「しかし、まあ、安心するがよい。諸君らに影響はないだろうから」

「な、なにを仰せられますか陛下！！」ヘルガは顔色を変えて叫んでいた。「ケストル王国には大勢のひとが！ あなたのご子息までもがおられるのですよ！！」

皇帝は黙ってマントの下で腕を組んだ。

「ケストルは巨人族に襲われなかった数少ない国のひとつ。被害をなにひとつ受けていないのだから、我々も地下都市への誘導をしなかった。氷河決壊の災難に巻き込まれる



としても、もはや手遅れ」

「バイスロイさまは！！ エウメロスの者も同行しています。彼らは私のためにケストルに残ったのです！！」

「……………」

「助けに行きます」低く宣言するヘルガである。投げた視線の先ではスクナがヘルガを見ていた。彼はヘルガに弱かった。ヘルガの視線を受けて迷わずうなずいてしまった。

「ちょ、ちょっと、待ってください！！ まさか、殿下がご自分で！？ とんでもない！！ 僕が行きます！！」

「レル。ありがとう。でもこれは私の問題なの。バイスロイさまは私の婚約者なのですから」

王女と近衛隊長の間に火花が散るのをコタエはありありと見た。

ヘルガはいったん目を閉じ、喉を鳴らしてなにかを呑み込んだ。「ケストルにはエウメロスの航空機が一機残してあったはず。それを使えば彼らを脱出させることができるのでは——？」

レルは答えられなかった。答えればヘルガのケストル行を認めてしまうことになる。

答えないレルをその場に残し、ヘルガは皇帝に向き直った。「陛下、陛下のお見立てが正しいとして、氷河決壊までの猶予はいかほど？」

「私の見立ては最悪の事態を想定してのもの。氷河決壊は起らぬかもしれぬ。あるいは、明日にでも起こるかもしれぬ。正直なところ、わからぬ。それにしても王女よ、助けに行くとして、どうやってここから出るというのだ」

「彼は」と、ヘルガはスクナを指さした。「瞬間移動ができるのです。その方法でこの閉じられた地下シェルターに入ってきた。むろん、出ることもできるのです」

## 283.

ナシルからは新しい情報はなにもないという情報が入った。状況がどうであれ、ヘルガの決心は揺るがなかった。ケストルへ行く。そしてバイスロイと彼に随行している者たちを連れて帰る。

コタエは兄からここに残るよう説得された。ヘルガ一行との連絡係として。スクナがヘルガを連れて雲隠れする気はないことを示す担保役でもあった。人質ね、と思いつつ、ヘルガの相談に乗る。

服装はどうしたらいいかという、女性ならではものだ。彼女の持ち物といえば、大事な儀礼用衣装、これは弟がもちだしてくれていた。それと帰国時に用意されたケストル製の薄物だけだった。ほかの持ち物はどさくさに紛れて返却されなかった。今は軍の制服を着続けている。儀礼用では仰々しいし、かといって軍の制服では喧嘩を売りに来たのかと誤解されかねない。さてどうしたものかと考え、儀礼用を旅行用に改造することにした。その旨を黄金門のメンバーに伝えると黙って引き受けてくれた。

濃い茶色のロングドレスの胸元と裾、袖には金糸の刺繍が施されていてたいそう気に入っていたのだが、きらびやかな装飾はすべて諦めた。淡い金色の髪は編み込んでまとめ上げ、耳には小ぶりの金のイヤリング。

着替えて現れたヘルガに、皇帝は「これを着けていくように」と、首飾りを渡した。それは首飾りというより胸飾りといった方がいいようなもので、精巧な浮彫のある黄金の小さな板を何枚も何枚も、碧い宝石のビーズでつなぎ合わせてあった。これで国がひとつ買えるのではないかとスクナがびびったほどの豪華なものだ。

「これを持つ者に、なんびとたりとも逆らえぬ。皇帝家のしるしであるゆえ」

「ま、そなた自身がさらわれてしまったらそれまでであるがな」皇帝の顔つきから、彼が軽口を叩いているとわかって、ヘルガは少しばかり気が楽になった。黄金門の人々にとってもバイスロイの不在は悩みの種だったにちがいがなかった。ただことの成り行き上、取り返す手段もきっかけもなかったのだ。

「かならず、バイスロイさまをお連れします」

うむ、と皇帝はうなずいた。

彼女のあまりの神々しさにレルは我を忘れてみとれていたが、気持ちを固めた。己の剣を捧げようとも考えたが、同行するのがスクナなら剣など不要、やはりこっちがいい。

ヘルガはレルの近衛隊の紺藍色のマントを受け取る。それはこげ茶色の衣装も黄金の胸飾りも邪魔しなかった。むしろ彼女の金髪をひきたてた。レルは黙礼し引き下がった。

「行ってまいります」

言い残し、ヘルガはスクナとともに旅立った。かつて命がけで脱出したケストルの地へ。

第十七章 『ブルー・マーキュリー遭難』

第十八章へ続く

## back number

### 第一部

#### 『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

#### 『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

#### 『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

#### 『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

### 第二部

#### 『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

## 『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

## 『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

## 『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

## 『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナを抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

## 『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

### 第三部

#### 『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

#### 『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

#### 『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

#### 『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

### 『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

## 第四部

### 『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

### 『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』



## 第十七章のあとがき

王子殿下はオオカミ少年になりかけ、皇帝陛下は理科と社会科の先生と化した今回、説明に次ぐ説明！　そしてティコ博士はジャイアンか！？

まあ…ね。核反応の仕組みや原子爆弾の仕組みなど、そう興味のある方はおられないでしょうから、それらしく書いてお茶を濁しちゃえ、といったんは思いましたが、それではminemuraの良心が許しません。ただ、表現を変えるほどの理解度には遠いため、そっくり引用させていただきました。

氷河が決壊して洪水を起こすというのも耳慣れない話なので…あとがきの最後に使った資料をリンクしておきます。いらない…でしょうねえ

よーするに、災厄災厄また災厄ということです。

さて、サミュエル・コーエンという人がいます。（2011年に没）

『中性子爆弾の父』といわれるおひとで、暴力的な核爆弾と違って中性子爆弾はモノを壊さない、道徳的ですからある、正義の爆弾だ、というようなことをのたまった人です。しかし、彼のいうとおりの構造の爆弾も反応を起こせばエネルギーの七割は爆風として外へ放出されるといいます。モノを壊さないクリーンな爆弾など、コーエンの頭の中にしかなかった。

そしてこの人が「コレを使ってコンパクトな核兵器を開発しました」と主張したのが赤い水銀・レッドマーキュリー。だいたい、水銀の化合物は赤い色をしているのと、最初に登場したのがロシアだったので、赤、ということらしい。ひとことで言ってあやしい物質。

ブルース・ウィリス主演の映画『レッド』の2のほうでこの物質を使った核爆弾がでてきますが、「赤い彗星」、じゃなかった、「赤い水星」と訳されてました。しまいには主人公のわりと近いところで爆発してたけど、いいのか？　と思いましたよ。

なお、本編ではコパーン博士とブルーの水銀になっています。

参考資料は[こちら](#)が核関係  
[こちら](#)が氷河洪水の関係

前回、第十六章のあとがきで、メソアメリカとユーラシア大陸の真ん中、こんなに離れた場所になぜ同じ音の地名があるのかと書きました。

その考察を[こちら](#)でやっております。よかったらどうぞ。

※・リンク先は別窓ではありません。戻るにはブラウザの『戻る』で。



## 奥付

Salamander in the circle

第十七章 ブルー・マーキュリー遭難

2023年6月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [pngtree](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---